

# 過去の事実を学び、現在と未来の教訓に！

## 731部隊について学ぶ！

# かべしんぶん

平診九条の会

2017年10月号  
(通算47号)  
発行  
平診九条の会



安保法制（戦争法成立）から2年の9月19日のスタンディング行動

9月25日に平診九条の会が開かれ、11人が参加しました。今回は、戦争体験を聞く(20回目)を斉藤琴路看護師が報告(裏面に掲載)。ミニ学習会を開催しテーマは「七三一部隊」で浜井卓太事務主任が報告しました。その後参加者全員が、意見や感想などを述べました。(発言の要約を掲載します)

●自分が学生時代通った学校でも七三一部隊に関わりのあった人がいた。ただ学校ではそういうことは一切触れられなかった。おそらく関係者もいたのだろう。怖いのはそういう事柄を「でっちあげだ」という人がいること。本来戦犯で裁かれるはずが、アメリカに詳しい資料が渡ってしまった。データが明らかにされていない。原爆もアメリカが落として資料を持って帰ってしまった。

●ナチスによる生体実験では、最終的に実験により死亡率が六〇%だったのに対し、日本の七三一部隊は「ペスト菌実験」で生き残り、また違う実験で使いまわしをし、九〇%に近い死亡率だった。七三一部隊の関係者は、自分たちが助かるためにアメリカに資料を渡し、命乞いをし、次の人生の再スタートを切ることまでしている。七三一部隊の関係者は圧倒的に京大卒や東大卒の医師が多いが、北大の医師も関係したと言われている。当時のデータを参考にし、何も知らないで今の医学へ受け継がれている。それがミドリ十字社の「薬剤エイズ事件」の流れへとつながっている。批判的に教訓を導き出すことが大切だ。

●わからないことを知り、そこで事実を知ることが大事。「原爆を許すまじ」は覚えている人がいなくなっているが、唄い続けてもいいと思う。まだまだ価値のあるものだ。

●まだまだ知らないことが沢山あるのですね。知ろうとしなければならぬし、大変勉強になる。

●人を人として憎まずと教えられたが、戦争がそうさせてしまった。

●「悪魔の飽食」を読み内容が生々しく思い出して落ち込んだ。人のいのちを救う医師がそうさせたのはやはり戦争のせいだ。

●七三一のことは聞いたことはある。戦争の感覚が薄れてきていることはある。それは恐ろしいことだと思ふ。事実を知ることが大事だと思ふ。

●七三一は初めて聞いたわけではなかった。そういう行為を行って何も感じなかったのか？ どういう状況だったのか？

●月間保団連の二〇〇二年八月号に湯浅謙医師が「なぜ私が『生体手術演習』をする軍医になったのか」というテーマで書かれている。中国人の被験者の生体手術を行ったことを明らかにしている。湯浅医師は自己責任も言及されて「いままでの反省の仕方は軽かった」と。

●とても衝撃を受けている。残虐で「日本人ではないから」と実験対象にする。こういうことを知る姿勢が大切だ。

●何となく七三一部隊のことは知っている。今のアメリカにデータがあるのなら公開されてほしい。ゆがんだ形ではあると思ふ。

●赤旗新聞で毎日連載されていて内容は鮮明に覚えていて。人を人だと思ふとああいうことはできないのだろう。そこで差別意識をとことん作っている。戦争の頃中国人を「チャンコロ」と言っていて悪いことをする人だと叩き込まれた。そこで差別意識を持った。「無差別平等」は難しいし、戦争は間違いなくそれに対して悪になる。「マルタ」と呼ばれていたのは「丸太ン棒(マルタンボウ)」だから。北海道でもアイヌの問題もあり差別意識もある。

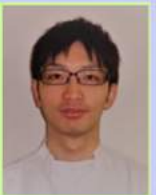
### ミニ学習

#### 「731部隊について」

講師

浜井卓太事務主任

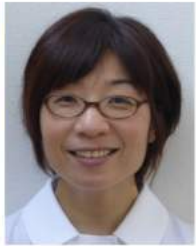
＊資料の要約を掲載



「七三一部隊」とは、第二次世界大戦中の陸軍において、生物兵器の研究・開発を目的として数多くの残虐な人体実験(ペスト菌等の細菌実験や凍傷実験等)を行っていたとされている部隊のことである。その人体実験の被験者には主に捕虜(主に朝鮮人・中国人・モンゴル人・アメリカ人・旧ソ連人)が選ばれており、被験者は「マルタ」と呼ばれて非人道的な扱いを受け、その犠牲者の数は約三千人にも上ったという。この部隊は、初代部隊長である石井四郎の名前にちなみ「石井部隊」とも呼ばれている。

戦後、関係者は極東国際軍事裁判(東京裁判)で戦犯容疑を受けるが、GHQのマッカーサー司令官とウィロビー少将の協議によって、詳細な細菌戦の研究資料を提供したため、訴追を免れたとされる。2代目隊長の北野政次は日本ブラッドバンク(後のミドリ十字、現在は田辺三菱製薬)の顧問を務めた。ミドリ十字の設立者は内藤良一(元軍医で石井四郎の片腕といわれた)





# 戦争体験を聞く (20回目)

83歳のT・Yさんから、斉藤琴路看護師が聞き取りを行い報告しました。

昭和9年4人兄弟の3番目として三笠市で生まれた。幼かったため戦争をしているということはよくわからなかった。ラジオで「どこどこに爆弾が落ちた」「攻撃を受けた」と流れていたのは聞いていたが、実際見たことがなかったため実感はなかった。近所で兵隊に行った人がいたが帰ってこれなかった。「本当に帰ってこないこともあるんだ」と子供心に怖かった。小学校ではあまり勉強した記憶がなく、どんな教科があったのか覚えていない。「天皇陛下は神様だ」ということを教わった気がする。自分はやっていないが、棒のようなものを持ち、武道のようなことをしているのを見たことがある。詳しいことは覚えていないが、朝礼では毎日「お国のために」「日本は必ず勝つ」などという言葉を暗記させられ言わされた。その当時は当たり前だったから疑問にも思わなかったが、いま思えば無駄なことだったと思う。

終戦は小学5年か6年生の頃、周りの大人から聞いた。「あ、終わったのか」としか思わなかった。その頃に父親も亡くなったため終戦のことはあまり覚えていない。当時は今のように入院することなどなかったため、父親の死は突然だった。学校から帰ったら亡くなったと聞いた。父親が生きていた時は生活も安定していたが、亡くなった後は色々苦労した。長男次男がすでに働いていたので生計を支えてくれた。母親は働いていなかったが、父親代わりになり育ててくれた。近所に農家があり、食糧を分けてくれることもあった。近所付き合いも良く、お互いに支えあって生活していた。中学に上がり、大変なこともありそこは話したくない。中学を出てから営林署で働き、住友炭鉱に勤めていた頃に妻と出会い結婚した。

それから芦別の三井炭鉱に移り、閉山となる54歳まで働いた。働いているときに「じん肺」と診断を受けたが、生活がかかっていたため仕事は続けていた。戦争について「嫌だ。ああいうことは二度と起きてはいけない。核はおっかない」と話していた。

\* 芦別・美唄・赤平・歌志内では空襲を受けることはなかった。また芦別をはじめ美唄、赤平、歌志内では連合国軍の捕虜収容所があり、戦時中に捕虜による炭鉱の強制労働を行っていた。

## 核兵器禁止条約、国連で署名式、五十の国と地域が署名!

9月20日に行われた国連総会核兵器の開発や保有などを法的に禁止する核兵器禁止条約の署名式が行われ、条約の早期発効を目指して20日中に50の国と地域が署名しました。

核兵器禁止条約は、核兵器の開発や保有、使用などを国際法で禁止し核兵器の廃絶につなげようというもので、ことし7月、国連加盟国の6割を超える112の国と地域が賛成して採択されました。しかしアメリカやロシアなどの核兵器の保有国や、日本などアメリカの核の傘で守られた国々は、「現実的な核軍縮にはつながらない」として、条約に反対しています。



20日、ニューヨークの国連本部で条約の署名式が行われ、国連のグテーレス事務総長は、「条約は核兵器のない世界に向けた重要な一歩となる。世界と子どもたちの未来を危険にさらすことはできない」として、条約の意義を強調しました。



▲外来の待合コーナーに設置された「ヒバクシャ国際署名コーナー」と「折り鶴コーナー」多くの署名を集めましょう。

次回の平診9条の会  
運営委員会

日時：10月23日(月)  
内容：戦争体験を聞く  
(21回)

ミニ学習  
「戦争に反対した人々」

\*いよいよ、アコーディオンとたて笛の演奏で「原爆許すまじ」の披露です。